泥の河

「泥の河」文学碑保存会

10周年記念志

記念碑建立10周年のお祝いの日には、たくさんのＢＴＣのメンバーが参加してくださって、ありがとうございました。
ぼくも東横堀川や道頓堀川を船で周遊するのは初めてで、あんなに素晴らしいものとは考えもしていませんでした。
道頓堀橋の下をくぐるときは、数年ぶりに岸本水府の「道頓堀の雨に別れて以来なり」という川柳を心の中でつぶやいたりしました。
大阪がなぜ大昔から「水都」と呼ばれたのかが、とてもよくわかるクルージングでした。

宮本輝

注記:本メッセージは、宮本輝先生の公式サイトにおいてBTC:Bar Teru's Clubのメンバーの皆様宛に投稿されたものを転載しております。

「泥の河」文学碑保存会
１０周年記念行事

２０２２年１０月２２日（土）

一本松汽船・ポンポン船にてクルージング後、祝賀会開催

「泥の河」文学碑とは

追手門学院大学第1期生である宮本輝氏のデビュー作「泥の河」の舞台になった大阪・中之島西端に架かる湊橋の南詰めに建立された文学碑のことです。この文学碑は、湊橋の袂で船会社を経営する一本松伸氏（追手門学院大学2期生）のぽんぽん船船着き場が「川の駅」として認定されたことを機に、一本松氏が発案、株式会社ジョイ企画社長平野昌雄氏（当時大学校友会会長）、江戸堀連合振興町会吉田安雄会長（当時）の呼びかけで、追手門学院大学の協力も得て、有志によって設立されました。一本松氏と宮本氏は実家が隣で、幼い頃に一緒によく遊んだ仲でもあり、「泥の河」発祥のこの場所に記念になるものを残したいという一本松氏の思いが結実したものです。

10周年を迎えた文学碑保存会

「泥の河」文学碑保存会　会長
学校法人追手門学院　理事長
川原　俊明

２０２２年（令和４年）10月22日、「泥の河」文学碑保存会発足10周年の記念式典が執り行われました。「泥の河」文学碑は、本学の1期生であり、芥川賞受賞作家の宮本輝先生のデビュー作「泥の河」が１９７７年に太宰治賞を受賞したことを記念して、作品の舞台となった中之島の川沿い（土佐堀川湊橋南詰）に、建立されたものです。その際に発足したのが「泥の河」文学碑保存会であり、発足から早くも10年が経過しました。

その間、文学碑維持管理のため、一本松伸副会長（一本松汽船社長）にはボランティアで文学碑周辺の草取り等の管理を、尾松正章副会長（江戸堀連合振興町会会長）には、さまざまな面で後押しをしていただきました。10周年を迎えることができたのは、まさに保存会のみなさんのおかげです。

併せて、尾松副会長を始めとする江戸堀連合振興町会のみなさんには、長年にわたり保存会会合を

開催する際に公民館を提供していただき、大変お世話になりました。

「泥の河」文学碑保存会10周年記念行事当日は、天候にも恵まれ多くの参加者が集い、盛大且つ楽しい行事が行われました。

宮本輝先生ご夫妻に参加いただいたおかげで、北海道から沖縄まで全国各地から多くの方が駆けつけてくださり、愛読者層の広さに驚きました。

その他、日頃より文学碑保存会にご支援いただいている西区区長の三村浩也様、府会議員の横倉廉幸様もご参加されました。

一本松副会長のご厚意により2艘の船をご用意いただき、約90名近くの参加者が分乗し、大阪の川巡りが行われました。

先頭の船には、宮本輝先生ご夫妻や、日頃、府議会活動を通じて大阪の河川行政に携わっておられる横倉廉幸議員が乗船されました。横倉様に大変詳しいガイドを務めていただき、いままで知らなかった多くのことを学びました。近年、橋げたをすれすれに船が行き交うことになったのも、大阪の地盤沈下が原因だとか。

出船時に、真銅学長と「川には信号がないから、交通渋滞を回避するために、河川を利用した通行もいいね。」という雑談をしたにもかかわらず、出船してからまもなく、川に信号があることを発見しびっくりしました。

道頓堀川との川面と高さが異なるため、閘門を介して水面の高さを調整する必要があり、待機している時間に後続の船と衝突しないよう信号が設けられていたのでした。川の周り角には「カーブミラー」も。

後続の船には、亀井哲夫先生（元大手前中・高等学校長）も乗船され、参加者との交流もあり和やかな川巡りとなりました。

下船後に開催された祝賀会。宮本輝先生のユーモアのあるお話や、テーブルごとの記念撮影会など、時間の経過を忘れるほどでした。

宮本輝先生は、「泥の河」で太宰治賞を受賞された後も、数々の作品を発表し、最近では「流転の海」などのシリーズものを完結され、現在、新作を作成中とのことでした。

宮本輝先生の今後ますますのご活躍を祈念いたします。

「泥の河」文学碑建立10周年記念に寄せて

「泥の河」文学碑保存会　副会長
江戸堀連合振興町会　会長
尾松　正章

「泥の河」文学碑建立10周年記念を迎え、お慶び申し上げます。

いつもは、これと言った思いも無くぼんやりと、船が浮かんでいる川面を眺め、せいぜい西の空を眺めて夕焼け空だから明日は晴れか程度の虚ろな思考の頭で歩いている。

そんな感じでたまに佇む場所が、「泥の河」の舞台となっている所からほど近い湊橋で、その南詰下流側に文学碑がある。ここは、土佐堀三丁目に所在する。小説に出てくるやなぎ食堂は一つ下流側の端建蔵橋（はたてぐらばし）の袂となる。

この辺りは、伊勢湾台風、第2室戸台風での高潮被害をもう起こさないようにと昭和32年頃から堤防を垂直のコンクリート堤防で2mから3.5mも

嵩上げされ、合わせて橋も持ち上げられた。

災害に強い町になったが、泥の河当時の人々の生活の姿を見ることはもうない。

10周年かと思い改めて湊橋に来て、町には往時の面影は無いが、文学碑を見て、橋の上から川面を眺めると今も船が係留されていて、へえ、ここが泥の河の舞台で、食堂はあの辺、船はこの辺りかと想像力をかき立てる。

ぼんやりと川面と西の空を眺めるのも気持ちが良いが、「泥の河」の往時を想像するのも面白い。一つ楽しみが増えた。

「泥の河」の舞台の間近の端建蔵橋は、明治10年頃幅3間3寸（5.5m）程の木の橋が掛けられ、明治42年頃の市電事業で鉄の橋に掛け替えられ、大正10年頃にも幅20mを超す橋に掛け替えられた。

今また、令和の架け替え工事が行われていて三年後にアーチ形の近代的な橋となる。益々、町の様相は変わっていくが、橋、川面、ポンポン船が見える泥の河の文学碑をのんびりと楽しみながら、しっかりと見守っていきたいと思う。

宮本輝さんに会いたかった・・・

「泥の河」文学碑保存会　理事
土佐堀第三振興町会　会長
森田　吉彦

まさに、10月22日の「泥の河」文学碑10周年記念行事の前日、夕方より何故か体の調子が悪く、当日の朝、ついに38度の熱が出てしまいました。不本意ながら、欠席の連絡をせざるを得ませんでした。

思い起こしますと、約2年前、文学碑が我が土佐堀第3振興町会のエリアにあるというご縁で、理事会に参加したり、文学碑の清掃をしたりと、文学碑保存会の末席に加えていただきました。清掃をしていますと、「これは何ですか。」と質問される方や、地図を片手に文学碑の写真を撮っていかれる方など、いろいろな出会いもありました。

出会いと言いますと、私が宮本輝さんの「泥の河」という作品に出会った時、

「あっ、堂島川、土佐堀川・・・知ってる川の名だ」と気づき、恥ずかしいことに、そこで初めて作品の舞台がここ、すなわち自分が生まれ育った場所だと分かりました。

読み進めていくうちに、そういえば小学校の高学年の時に、船で生活をしていて、学校に通っていたH君が居たのを思い出しました。それこそ、私の家からすぐ近くの湊橋の近くに船を止めていました。学校からの帰り道が同じなので一緒に下校しました。堤防の所から船に渡した板を伝って船に乗り込む姿や、遊びに誘いに行って船から出てくる姿を覚えています。でも、H君が、いつからいつまで小学校に通っていたのかは覚えていません。卒業式の名簿には、H君の名前は無かったように思います。そんな思い出とともに、毎日のように記念碑の前を通って行ったりと、私の日常は続いていきます。

「泥の河」文学碑10周年記念行事について

「泥の河」文学碑保存会 理事
株式会社ジョイ企画代表取締役
平野 昌雄

10月22日土曜日、10周年記念行事が開催されました。

2011年6月皆様からの強いご要望、ご支援のもと西区湊橋文学碑が建立され早や10年がたちました。

本来なら昨年開催の予定でしたが、コロナウイルス感染症の関係で1年遅れの開催になりました。

当日は晴天に恵まれ、宮本輝氏、ならびにご夫人も参加され、遠くは北海道や、九州から来阪されて約90名が集いました。

一本松汽船(株)のご協力により、遊覧船2船で天満八軒屋浜船着場を10時30分に出船し、東堀川～道頓堀川～木津川（途中2か所の

水位調節の水門）を遊覧し、西区の湊橋南詰で下船、10年の月日を経た文学碑を各々がひと時感慨深い思いで囲みました。

その後、中之島センタービル2階で祝賀会が開催されました。

祝賀会では、『宮本輝全短編集』（サインと落款入り）の抽選会とテーブルごとの宮本輝氏との写真撮影等が行われ充実した素晴らしい時間を楽しくすごせました。

最後になりましたが、開催にあたり関係者の皆様には多大なるご協力いただきありがとうございました。

「泥の河」文学碑について

「泥の河」文学碑保存会　監事
WISE労務事務所
黒岡　義一

学生の頃、なんとなく通ってた。
大学生であることがブランドだったような気もする。
得たものはと言えば、現在の妻だけかもしれない。

またなんとなく卒業し、親の七光りで就職した。
バブル景気に湧く頃だっただけに我ながら良く働いたと思うけど、
40歳を前にあえなく退職。このあたりが私の転機だったように感じる。
その頃、今もお世話になっている大学の先輩、一本松さんに出会い、
当時校友会会長だった平野さんをご紹介いただき、追手門学院大
学の諸先輩方との交流が始まった。

その後、宮本輝さんともお会いする機会を頂いたのは、もうすでに十数年以上前のことと記憶している。
「泥の河の文学碑を作ろうや」一本松さんと平野さんが言い出しっぺだったな。
折しも一本松汽船（一本松さんの舟運会社）の船着き場が小説の舞台のど真ん中にできたこともあって、
その機運は高まりましたね。
「地元のみなさんのご協力なしにでけへんで」「大阪府・大阪市にも協力をしてもらおう」とお二人が
駆け回り、そのカバン持ちでご一緒させていただいた。出来上がったときは嬉しかったな。
文学碑ができて11年。今後は大学が文学碑を守ってくれるという。よろしくお願いします。
地元の皆様・一本松様・平野様、これで安心ですね。

「泥の河」文学碑10周年記念行事を終えて

「泥の河」文学碑保存会　監事
学校法人追手門学院　図書メディア課長
安井　智美

「泥の河」文学碑の建立10周年・記念行事を終え、まずはご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。

私が初めてこの文学碑を拝見したのは、２０２０年7月29日でした。「泥の河文学碑保存会」理事会に出席した後で当日はかなり暑く江戸堀会館から文学碑まで汗だくになって歩いたことが思い出されます。理事会の皆様もご案内してくださり、せっかく集まったのだからと、暑さで朦朧としつつ集合写真を撮りました。川沿いなので周りは背の高い草が生えているところもありましたが、文学碑の周りはきれい掃除されていました。

あれから2年、新型コロナウイルスの流行によりこの記念行事は何度も延期になり、このまま執り行うことが難しいのではないかと思われたのですが、ようやく行動制限もなくなり実現することができました。

当日はお天気にも恵まれ、秋晴れの爽やかな気候でした。私は船に乗る皆さまをお見送りする担当でしたが、どなたも晴れやかな笑顔で乗船され、この日を待ち望んでおられたことが伝わってきました。船が発進して手を振っていると、小説「泥の河」に描かれた当時の状況から、長い時を経て河や街も形を変え、大阪は発展してきたのだと改めて感じました。

その後のパーティーでは宮本輝先生の「90歳まで小説を書くぞ」宣言、非常に頼もしく素敵でした。コロナ禍の中、私達はこのように前向きなことをなかなか言えずに過ごしてきましたが、宮本輝先生のお言葉に背中を押された気持ちです。これからもお元気で新しい作品を生み出してくださいますよう、心より応援しております。

宮本輝小説「泥の河」のなかに散りばめられたことばのご紹介

おうれ！

喜一、黒砂糖あったやろ。
あれでも出してあげ

いつのまにやろ・・・・・・。
あの乳飲み子が、
それでもあないに大きなったわ

もうこの川ともお別れやなァ

お米がいっぱい詰まってる米櫃に
手エ入れて温もってるときが、
いちばんしあわせや。

・・・・・うちのお母ちゃん、
そない言うてたわ

きっちゃん、お化けや。
ほんまにお化けが
うしろにいてるんやでエ

うしろにお化け鯉がいる、ただそれだけをどうしても喜一に教えてやりたかった。「きっちゃん、きっちゃん、お化けがいてるでェ、ほんまやでェ」

2005年 新潮社

Story

舞台は昭和30年、大阪。堂島川と土佐堀川がまじわり、安治川となって大阪湾に注ぐ。
その一帯に連なるように架かる3つの橋のひとつ、端建蔵橋。
そのほとりに住む8歳の主人公、板倉信雄。決して裕福ではないが、
食堂を営む父晋平と母貞子に愛情を注がれながら育てられている。
ある夏の日、食堂の対岸に一艘の舟が現われる。
母とともにその舟上で生活する姉弟、銀子と喜一との短く切ない交友を描く。
第13回（1978年）太宰治賞受賞作品。

作品の世界

端建蔵橋の畔に暮らしはじめたのは、宮本輝氏が5歳の時であった。
父の郷里である愛媛県南宇和郡から大阪市北区中之島7丁目に移り、9歳までここで過ごした。
『泥の河』で板倉一家が新潟行きを決めたように、宮本一家も富山行きを決める。
大阪の川の畔で暮らした4年間は『流転の海 第三部 血脈の火』にも描かれている。

「舟の家」と「泥の河」

「泥の河」は池上義一氏が主宰する同人誌「わが仲間」に「舟の家」というタイトルで発表された。宮本輝氏が作家を目指して修行中の時、池上氏に書き出しの十行をマジックインキで消されたというエピソードがある。この荒療治とも言える助言が大きな啓示をもたらしてくれた、と「川三部作」ちくま文庫版あとがきに記している。「泥の河」は文章技法の壁を乗り越えられた意味深い作品である。

※修行中、「泥の河」と「螢川」の両者を併せると13～14回、書き直しをしたそうだ。どちらも習作が「わが仲間」に発表されている。読み比べれば、作家が啓示によって得たものがわかるかもしれない。

「一生懸命に生きて来て、人間死ぬ時いうたら、ほれ見ぬかたいな死に方するもんや。」

煮豆屋が死んだ。父誠治が生涯で唯一栄光だった戦争も、海運業界にあっけなく死んだ。父晋平が苦労の人生を、新天地に賭けようとまっすぐな気持ちで生きたことのフレーズ。「生」のどうしようもないほどのもろさが晋平を襲い、倒れても立っても居られなくさせたのしばらく余韻を引く、強いフレーズ"です。

Kewicy

特別寄稿

とても幸福な時間

追手門学院大学　学長
真銅　正宏

追手門学院の発祥の地にほど近い、天満橋の八軒家浜から出発した一本松汽船の特別クルーズ船は、しばらく土佐堀川を進み、東横堀川水門に至りました。パリのサン・マルタン運河のクルーズのように、ここの閘門で水量を調節し、水面の高さを合わせ、船を進めます。これはめったにできない体験です。宮本輝氏ご夫妻と、川原理事長とともに、先頭の席に座りましたので、閘門の仕組みが実によく窺えました。

船はここから東横堀川を南下し、やがて右折西行して道頓堀川を進みます。小説「道頓堀川」の舞台です。主人公の邦彦が、まち子姐さんとともに犬の小太郎を探す場面では、我々の船もくぐった幸橋まで歩いていきます。

幸橋の真ん中まで行くと、邦彦とまち子は欄干に寄って、一直線につづいている夜の川の彼方の、道頓堀の光彩に見入った。川に光はなく、それは歓楽街に伸びて行く底深い一本の道に見えた。道は橋々をくぐって後方の、遠い高層ビルのほうにまでつづいて行く。苔や青みどろに覆われた太い材木が浮かんでいたが、それも道に捨て置かれた黒い岩のようである。道の果てに四角いスクリーンがあって、そこにぽつんと七色の光が映し出されているのだった。

なるほど、自分はあんなところで生きているのかと邦彦は思った。あんな眩ゆい、物寂しい光の坩堝の中で生きているのか。

そしてここで二人は初めて口づけを交わすのですが、後にこの時のことを思い出して、邦彦は次のようにも考えています。

眩ゆく華やかな眺めであったはずだったが、邦彦には、かつて見たこともない冷え冷えとした、ひどくちっぽけな景観として心に甦って来るのである。

色とりどりの光をまとった船が、暗い海原に出航して行き、それを視界から消え去るまでじっと見送っていた、そんな空虚な寂しさがまといついて、邦彦は幸橋から見えていた夜の道頓堀が、人気のない一艘の満艦飾の船みたいだったように思えるのだった。

この場面を思い出し、二人が歩いた距離に少し驚きつつも、ミナミという土地の感想として、妙に納得しました。ミナミの光景は、私も高校生時代から見慣れているつもりでしたが、船からの道頓堀は、目線の高さの違いだけでなく、何かを裏側から見たような全く別の顔を我々に見せてくれました。

やがてクルーズ船は、同じく閘門である道頓堀川水門を過ぎて木津川に入り、北上し、いよいよ「泥の河」の舞台を目指します。

堂島川と土佐堀川がひとつになり、安治川と名を変えて大阪湾の一角に注ぎ込んでいく。その川と川がまじわるところに三つの橋が架かっていた。昭和橋と端建蔵橋、それに船津橋である。

「泥の河」の有名な冒頭の文章ですが、この三つの橋からほど近い湊橋のたもとに、ゴールである「泥の河」文学碑はあります。

宮本輝作品の舞台の実感と、そこから生み出された作品の虚構性の魅力を、改めて思い知った、素晴らしいクルーズでした。

この後の懇親会では、宮本輝氏直筆サイン本の10名プレゼントの抽選に、なんと私が当選してしまいました。

この日の幸福の念押しとなりました。

「泥の河」文学碑保存会

10周年記念志

発行日　2023年2月

発行者　「泥の河」文学碑保存会事務局（追手門学院大学図書館内）

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番15号